校友時報

昭和50年3月1日
編集人兼発行所
秋田県能代市高塚2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 大藤堂印刷所

新たなる世界を求めて

卒業式、本日挙行

この校舎に移転して四ケ月になろうとしている。この寒風のさらら高塚の校舎への通学は我々に苦酷な試練である。だが通学の度々に頬をなでる風はきのうとは違い現実に微妙になま暖かくなって来ている。

こういう時期に私たちは二十七期生四二名（女子二十六名）の卒業生を送りだそうとしている。この三月一日、この新校舎での最初の卒業式が挙行される。新学校での卒業式の出席者が少ないというのは我校も例外ではなく、大学受験のため約六割程しかこの式典に出席できないのは残念でたまらない。

多感な年代の高校生活の三年という年月は成長という名のもとにおいて少なからず人間を変えた。

卒業する今、三年生には様々な想い出が脳裏をかけめぐっているであろう。

入学式の日、あの椿子山のボロ校舎に驚嘆し、初めてプラタナスの若葉の並木を通学時の希望を持って歩いた足どりは軽かった。想い出多き修学旅行、いつにない情熱を持って団結した文化祭、体育祭。苦痛と充実感の交錯した十七重唱歩。後一週間位は足をいたわりながら歩いた。

卒業をまちかに控えあわただしい校舎移転。旧校舎で卒業式をしたかったという声も多かった。想い出深い旧校舎が近く取壊されてしまうのはとてもさみしいことである。特に健康に気をつけなければならない三年生は新校舎の通学に例年の様にかまってはいられなかったからマスクで顔を覆い、さらにマフラーをして長ぐつをはいた。中には手袋もつけずにがんばっている者もいたが。

またクラブ活動にはげんだ人もいたろう。流した汗は椿子山の地に消え、活動の実績はこれからの後輩の支えとなるであろう。

高塚の地に、初めて「ほたるの光」の歌声が響きわたり、やがて三四二名の若人は個々の目的に向ってそれぞれの道を確実に歩み始めるのであろう。初心を忘れないでほしい。

なお、三年間無欠席、無欠課、無遅刻のパーフェクト出席者に贈られる皆勤賞は次の通りである。

三A　加藤　秀樹
三B　渡辺　慎一
三C　菊地　禎三
　　菅原　博朗
三D　田口　勝彦
三E　佐藤　力
　　佐々木　進
三F　佐々木文明
三G　三戸　敏
　　見上　孝一
（以上十名）

時間に追いまわされた予餞会

暖房設備のない体育館でも寒さを感じさせない中で、去る一月六日、三年生を送る予餞会が開催された。

マイクその他の準備が悪かったため開会のあいさつも全く聞こえないという状態で開幕となった。予定では最初にやるはずの演劇の会入会式が長びいたため時間が制約され辞退ということになり、プログラムは大幅に変更されギターの演奏準備に時間がかかったことやまだ不慣れなせいもあって、しらけムードが漂いはじめ、しまいには退場を促す手拍子まで聞こえるという状態だった。

それから一Fのロック。初めはヤジがとんでいたのだが、そのうちそれもおさまり、エレキやドラムの音が会場に鳴り響いていた。

この「白いかげ」は、途中でとんでもない写真が飛び出すなどのハプニングなどもあって、ますますふんいきが盛り上がった。

その後、一B有志による「悪野の無情」。これはあらかじめテープにふきこんでおいた声を流、それに合わせて口を動かすという方法が取られた。音声と動作がピッタリあった時もまだまだ時もあったも爆笑をかっていた。

それに続く一Eの重大ニュースでは、能高生にとって現在、一番身近かな問題である通学手段をとりあげたので共感をよんだらしくみな食いいるように舞台をみつめていた。

クライマックスはブラスバンドによる演奏、それまでのドンチャン騒ぎ一色のステージから一転して、静かで最後にふさわしいものとなった。

最初は午後三時の終了の予定であったが、結局二十分も遅れ終了した。そして例年のように、座ぶとんの飛びかう中の退場となった。

今回の予餞会は、

演奏の一部

ギター

燃える男らの通勤通学

現在能高生にとって通学が大問題となっている。移転直後のアンケートでは通学困難という結果を出した。その理由は色々あったが主なのが通学距離が遠い、道路が悪いということである。だが現在ではそれにも増して、雨が降れば道はジャビジャビとなるし、毎日が骨まで凍りしみるほどの冷たい風で吹雪など日は、校舎が全く見えなくなる幻の田園校舎となる。話によると中には校舎を通り過ぎて行った人もかなりいたそうだ。

我々は駅から、あるいは二丁目から学校まで行列をつくって歩き始める。それなればみんなとなるのだ。初めは自転車通学者もかなりいたようだが寒くなると共にその姿もだんだんと消え失せていった。現在では、一人としてそんな者はいないだろう。と普通ならばそう思うのだが、驚いたことにまだ二人いるのである。ああなればもう執念である。超人とでも言うべきであろうか。移転直後から今日まで、彼らを毎日のように見かける。一人は先生で一人は生徒なのだが、能高生の中には尊敬するとともにあきれている人もかなりいるようである。彼らは人並みはずれたものすごい根性の持ち主のようである。あの燃える男らは、いつまで耐えぬくことができるであろうか。

ところでもうすぐ春である。春の登下校は、暖かい日差しを浴びてさぞかし快いものであろうと今から楽しみである。

食堂、開設間近に

我校のセミナーハウスがいよいよ三月中に完成する予定である。現在は九分通り出来上がり、後は内装を残すだけとなった。その中に食堂があるが、前回の校舎移転に関してのアンケートで、通学以外に食堂がなくて不便と答えた人が一番多かった。だれもがセミナーハウスの完成を待ち望んでいるだろう。現在、弁当持参以外の生徒の大部分は、パンで代用している。

新しい食堂の収容人数は二〇〇人で旧校舎の時よりはるかに大きいが、パンの売れゆきからみても混雑が予想される。メニューはたいしたいろいろなものとなるであろうが、なるべくはまだはっきりしていない。

また、コーラ等の自動販売機の設置についてだが、ただいま検討中である。利用時間は昼休みなどで、食堂へ行く手段として一階のわたり廊下の非常口を使用する予定で、実際に私たちが利用できるのは新学期からである。

ノート大安売り

一月中旬に、東京の昭和ノートKKより、大学ノートの通信販売が本校に申し込まれ、さっそく購買担当の教師を経て、生徒会が一切の事務をひきうけた。

市価より約二〇％ノ前後安価で二種類あり、各H・Rの庶務委員によって予約が取られている。

進路志望状況

ことしもまた入試シーズンがやってきたが、旧教育課程最後の入試となって全国的に競争が激化し、国立一期校も倍率の倍率は昨年並だが、有名私大特に文科系学部が昨年に次いで大幅に増加し、一方「不況」「学費値上げ」を反映して、国立一期校も激戦もようである。

本校現役の第一志望状況（表①）の通りだが、何と言っても国立大志望者の増加、特に地元秋田大、山形大、弘前大などの志望がめだつ。これは「不況」などの社会的情勢によることは否定できないが入学当初から安易に志望を変えないようにという一貫した指導のあらわれでもある。○月12日現在の調査書発行状況は表②の通りだが本校としては例年通り経済学部、工学部が多いが、ことしは文学部、教育学部、農学部志望者も大幅にふえている。

「併願」も全国的に昨年（一人平均三・三校）を上まわる見込みで、も調査書発行通り受験するとすれば本校では三・九校にもなる。従って有名私大への志願者数は本校現役だけでも70名を越える所もでてくるである。

既に50名近くは推せんその他で入学決定済であるが、ここでも競争が激しく学校指定校を除いては残念ながら相当数の推せん入学希望者が合格できなかったことも事実である。

いずれにしても、ことしの大学の門も狭く受験生の前途は楽観を許さぬ情勢である。受験生諸君の奮闘を祈るのみである。

（進学指導部）

表①

Ⅰ、卒業予定者の進路状況（50．1．29 現在）

進学希望者数

種別	男	女	計
国・公立大	112	15	127
私立大	154	9	163
短大	5	0	5
計	271	24	295
養成所・各種校	15	2	17
合計	286	26	312

就職希望者数

		男	女	計
決定者	県内	19	0	19
	県外	11	0	11
未定者	県内	1	0	1
	県外	0	0	0
計		31	0	31

Ⅱ、おもな進学希望大学（第一志望）

岩手大	24	秋田大	40	明治大	20		
東北大	20	弘前大	10	法政大	13		
新潟大	14	山形大	21	早中大	12		
千葉大	4	横浜国立大	4		9		

表②

▷ 昭和49年度卒業予定者の調査書発行状況（2月12日）

○学部別

文学	188	医学	31
教育学	55	歯学	6
法学	181	獣医	6
経済学	272	農育	5
商学	73	体政	2
工学	243	家術	7
理(工)学	80	芸社	9
農学	45	福他	2
薬学	27		

○種別

国立Ⅰ期	101（実）92（併願 9）
国立Ⅱ期	149（実）127（併願22）
公立大	19
私立大	960
短大	17
各種学校	12

祝辞

ようやく春のきざしの見えはじめた今日、高等学校を卒業される皆さんに心からお祝いを申し上げます。

皆さんは今、御両親をはじめ諸先生、在校生など多数の方々の見守る中で、新しい世界へ出発されようとしております。

今日の皆さんの晴れの姿は、常に向上の意志を失わず、まじめに努力を積み重ねられた結果でありますから、このことに大いなる自信と誇りを持ってほしいと思います。この自信と誇りは、これからの人生にとって大きな心の支えとなる大切なものであります。同時にまた、この輝かしき門出が決して自分ひとりの力によるものでないことを思いをいたし、感謝の気持ちを持ち続けていただきたいものであります。

今後皆さんは、社会の一員として、大きな責任を担うことになりますが、そのためには、自分自身の役割を一層深く自覚しなければなりません。いろいろな場面で、自分の役割を、責任を持って果たすことは、決してやさしいものではありません。時には自分の存在そのものにかかわる厳しいものになることさえあります。そのためにも、生涯にわたって学び続け、広く大きな見地から自己を見直してゆくことが大切であります。

現代は、ひとりひとりのものの見方、考え方がさまざまであり、またそれらを伝達する情報も多岐にわたっております。ややもすれば、そうした流れの中に自己を埋没しがちになりますが、自分の選んだ道を自信と勇気を持って歩み続けてほしいと思います。

卒業とは、終わりの日ではなく、未来への希望に満ちた出発の日であります。新しい文化と価値を皆さんの若い力で創造する決意の日とされるよう期待しております。

昭和五十年三月一日

秋田県教育委員会

点

▼ここ数年来人口に関する問題が、国際的に大きく取りあげられてきた。「ほたるの光」という容器のなかにはどれだけの人類が住めるのだろうか？」などと、叫ばれながら。

▼しかし現在身の回りでこれを真剣にとらえている人がいるだろうか、とくに養うべく食糧との関係をうる食糧不足の世界をう世界各地域をみた場合、西アフリカやインドの飢餓のニュースは連日のように報道されている。

▼人類が増え続け、食糧が欠乏したときの惨状が、西アフリカやインド地方の飢死にみるとすれば、これは人類共通の問題であり、それもごく身近、あるいは、自分にもあてはまる場合を考えに入れると、傍観者の立場は捨ててかからなければならない。イナゴの大発生を憤った人々にも、この問題を真剣に考えてもらわなければならない。

▼人類共通の課題といったテーマを離れた場合の個人の生活を考えた場合、誰でも家庭を持ってはまず、なことであり、今後他の学用品でもこのような企画を、学校あるいは生徒会でひんぱんに行なってほしいものだ。また、これらの事務を簡素化するためにも、教室棟東階段下の「購買」の活用が望まれる。

▼このまま増加してゆけば人の生死はただ食糧の多少に左右されるようになるのだろうか。武力を持つことが一国の人口を安定させる最大の保障となり、弱者が滅びの道をとることにより、自然に淘汰されて強者だけが人類を存続させるのだろうか。強弱の立場が、個人対個人になるのか、あるいは国家対国家、人種対人種になるのか、それとも単に資産の差になるのか。いずれにしろ、この問題は人道的立場を離れては解決できない。そしてすでにその対策は立てられていなければ、また遅きに失することになるのだ。

本能と老後の不安にかられて子供を作る。また人間社会は死に対する恐れと悲しみとによって医学の発達と環境の安全化をヒステリックなまでに追求する。人類の総数を減らせるのは人類以外には無いとは誰もが知っていながら。人口膨大がもたらす未来に目をつむり、また大丈夫、遠い子孫の問題だろうと考えて、あまり真剣にこの問題を直視しない傾向がわれわれの現状ではないか。